
方丈記試論

「方丈記」現代語訳付き

三浦良

2013年5月3日

目 次

1 はじめに	3
2 「方丈記」が書かれた時代	4
3 「方丈記」の概要	6
4 「方丈記」が後世に及ぼした影響	9
(1) 夏目漱石の「方丈記小論ショートエッセー」	9
(2) 堀田善衛の「方丈記私記」	13
5 「方丈記」が現代に教えるもの	17
資料	
鴨長明「方丈記」(現代語訳)	19

1 はじめに

また昨夜も地震があった。地震のたびに 2 年前の「東日本地震」を思い出す。東日本大震災（2011 年（H23）3 月 11 日）は M9.0（震度 7）のかつて経験したことがない激しい地震で、この横浜で震度 5 強だった。東北地方ではその激震に加えて巨大津波と原子力発電所のメルトダウンが重なった。被害は東北 3 県を中心に広範囲に及んだ。状況が判るにつれて死者・行方不明者数も時間を追うごとに増え、2 年 3 月後の 2013 年 4 月段階では 18,562 人（死者 15,883+行方不明 2,681）になっている。

芥川龍之介の「本所深川」の最後に、本所深川を歩いた後で父と母に懐かしかったという話をした時に「方丈記」の「玉敷きの都の中に・・・」のくだりを読む段があつて、無常観に浸る場面がある。そういえば鴨長明が平安末期に京都を襲った数々の天災や人災に触れていたことを思い出して、「方丈記」を読み直した。

約 800 年前の鎌倉時代に書かれた本だが、災害など社会的異変があるたびに読み直される。その本には、目を見張るほど詳しく災害の様子が書かれている。当時、大火事、辻風、飢饉、大地震、遷都など四つの天災（地、水、火、風）+人災で五大災厄があつて、その様子がリズムカルな文体で簡潔に描かれている。しかし、その本は災害記として読むこともできるが、災害を記録して、ああ酷い、可哀そうと嘆いているだけではない。人の住まいなどは災害に遭えば一たまりもない。しかし人はそのはかない世の中をいつも乗り越えて生きてきた。むしろ人は災害には無力なことを十分承知の上で日々暮らしていると言ってもよい。そこで、作者の鴨長明という男は、この世は無常な世界なのだから、この世を人が正しく生きようとするなら閑居生活するしかないと考えて実践したのである。

鴨長明というのは俗名で、彼がこの本を書いたときは出家して蓮胤^{れんいん}という法名に変わっていた。だから「方丈記」は鴨長明作でなく蓮胤作というべきだという人もいるが、そんな細かなことはどうでもいい。隠遁した坊主が書いた本だから「法語」（仏の教えをやさしく説いた文）という説教書に分類できるかもしれないが、この本は、「災害記」であり、「閑居記」であり、「哲学書」の性格をもった論文である。「徒然草」のような日々の思いを書きつづったものではない。「方丈記」は、栖と人の生き方について彼の思想を主張するために書かれた論文である。

原稿用紙（4 百字詰め）にすればわずか 23 枚分の小論文だが、ここには約 800 年前のことだが、住いに人の生き方を見ることができると言いながらジャーナリストのように生きた一人の男の思想が描かれている。

2 「方丈記」が書かれた時代

鴨長明は、久寿2年（1155年）京都下鴨神社の惣官（宮司）・鴨長継の次男として生まれた。少年の時から聡明で学芸に秀でて、和歌が得意だった。彼は父の後を受け継いで下鴨神社の宮司になるのが夢で、将来を約束されたエリートとして育った。しかし、長明が20歳の時に父が没し、従弟に宮司の地位を奪われる。以降彼は貴族社会からドロップアウトされた生活を送るようになった。

長明が生きた時代は平安末期～鎌倉幕府の頃で、貴族社会から武家社会へ変わろうとした大きな時代の転換期で、社会は騒然としていた。

（保元の乱、平治の乱）

1156年7月2日、鳥羽上皇が死去した後、跡を継いだ後白河天皇に、崇徳上皇が反旗を翻して7月9日夜半に約1000騎の兵を集結した。これを受けて後白河天皇は腹心の藤原忠通を通じて源義朝や平清盛ら呼び集め、7月11日未明、崇徳側の集結場所を急襲した。これが「保元の乱」で、これにより長く続いた平安の世は終りを告げ、武家の政治へと時代が動き始めた。

その後も政権は落ち着かなかった。後白河天皇が皇位を二条天皇に譲ると、後白河天皇派の信西と二条天皇派の藤原信頼が対立。一方、源氏と平氏の間も、「保元の乱」の勲功第一の源義朝でなく平清盛が高い恩賞を受けたために源義朝の不満が増大。そこで、平清盛が熊野詣に出かけたすきに藤原信頼と頼朝が手を結んで信西を襲って梟首する。しかし戻った清盛に大敗してしまう。これが「平治の乱」である。この戦いで平氏政権の基礎が固まり、源義朝は伊豆へ遠島になった。

（鎌倉幕府）

1167年（仁安元年）には平清盛が太政大臣に就任し、平清盛の全盛期になった。武家政治が始まったが、武家同士で主導権争いを経て最初に武家政治のヘゲモニーをとったのが平清盛だったのである。

しかし、1170年代に天災が続くようになると、再び源平武士団の争いが始まり、次第に平家の支配に陰りが見えてくる。1180年8月に源頼朝が伊豆で挙兵すると、源平の主導権争いが本格化し、1185年源頼朝がこの主導権争いに勝利して鎌倉幕府を開いた。

（鴨長明）

鴨長明は平清盛が太政大臣に就任した時が12歳、源頼朝が鎌倉幕府を開いた時が30歳。20歳のころ父が亡くなり、次いで母が仕えていた二条天皇の中宮（高松女院）も没し、戦

乱の中で庇護者を失った。長明は有力な後ろ盾を失ったが、持ち前の和歌と音楽の力を活用して何とか貴族社会に残る努力をした。実際にも 33 歳で「千載和歌集」に 1 首入選し、後鳥羽上皇の和歌所寄人にも選ばれて「新古今和歌集」にも 10 首入選した。しかし、50 歳のある日突然出家する。原因は秘曲演奏トラブルや下鴨神社の人事問題があったようだが、よく判らない。「方丈記」にはこれらの政変や人事などは一切書かれていない。しかも「方丈記」は 57 歳ころに書いたものでそこに登場する 5 大災厄は 20 歳代～30 歳代に体験したことである。だから彼の思想のベースには、平家の繁栄と没落に対する無常観とそれに代わって登場した源頼朝らの新しい世代による新しい時代への期待があっただろうと思われる。

鴨長明年譜

西暦	和暦	事項	鴨長明の生涯
1155	久寿 2	鴨長明生まれる。(下鴨神社宮司鴨長継の次男)	誕生
1156	保元	7 月保元の乱	
1159	平治	12 月平治の乱	
1167	仁安	2 月平清盛、太政大臣に就任 (~1181 没)	(5 大災厄)
1177	安元 3 治承 1	4 月京都大火	★ 京都大火 (22)
1180	治承 4	6 月福原遷都 (11 月還都) 8 月頼朝、伊豆で挙兵 (~85 年源平の争乱)	(25) ★ 福原遷都 ★ つむじ風
1181	養和 1	~1182 年養和の大飢饉	★ 養和の大飢饉 (26)
1183	寿永 2	7 月平家都落ち	
1184	元暦 1	1 月義仲討死、頼朝に平家追討命令	
1185	元暦 2 文治 1	3 月壇ノ浦合戦、7 月京都大地震、 11 月源頼朝、守護地頭を任命して鎌倉幕府を開く	★ 京都大地震 (30)
1192	建久 3	7 月頼朝、征夷大將軍に任命	
1204	元久 1	鴨長明出家 (大原に住む)	鴨長明出家 (50)
1205	元久 2	3 月新古今和歌集を撰進、	
1211	建暦 1	長明、日野外山へ引越す (伏見区日野)	
1212	建暦 2	4 月鴨長明「方丈記」を著す	「方丈記」を著す (57)
1216	建保 4	鴨長明没	61 歳で没
1221	承久 3	5 月承久の乱 6 月京都に六波羅探題を設置	
1232	貞永 4	8 月御成敗式目を制定	
1274	文永 11	10 月文永の役	

1275	建治 1	1 月九州各国に異国警護番役を命じる	
1281	弘安 4	7 月弘安の役	吉田兼好 (1283~1350)

3 「方丈記」の概要

「方丈記」には文末に、建暦 2 年 (1212 年) 3 月末頃に桑門 (僧侶) の蓮胤が外山の庵で書いたとある。鴨長明は 1204 年 (50 歳) で出家して京都大原に隠棲するが、その後 (1211 年 (57 歳) 日野の外山 (伏見区日野船尾) に小さな庵を建てて住む。この小さな庵で書いた評論が「方丈記」である。理解しやすくするために、ここでは全体を 4 つの段落に区分して読む。

1 序文 (PP9~10)

世の中の人と住いは川を流れる水のように。都を見ると家々が立ち並んで、一見するとどの家も代々引き継がれているように見えるが、よく見ると昔からある家はごく少なく、住む人も入れ替わっている。

誰もが知っている有名な書き出しは対句を活用して整えられた文章で、名文である。ここには本書のテーマである住いのあり方から人の生き方を検証しようとする意図が示されている。「無常」を示す言葉があちこちに出てくる。世の中も人も「無常」である。しかし、「去年焼けて今年作れり」「朝に死に夕に生まるる」などといって、その「無常」の先には明るく照らす未来が期待されているという風を読むこともできる。

鴨長明はこの先の論述で、自分の体験をもとに無常の世を自分はどう生きてきたか、それは正しかったかと問い直す。人生を具体的な形で示すものが栖である。その人の価値観が栖に示されると考えたのである。

2 五大災厄 (PP10~26)

物心ついてからかれこれ 40 年になる、その間世の中の不思議な出来事を何度も見てきたと、次々の五つの災厄を語る。

(1) 安元の大火 (安元 3 年、1177 年 4 月)

安元 3 年 4 月の京都の東南から出火し北西へ燃え広がって、市域の 2/3 を焼き尽くしたという大火事である。その描写が小気味よい。

人の営みはどれも当てにならないものなのに、こんなに危険な京都市中に大金をかけて家を建てて、あれこれ心配ばかりするのは全く無駄なことではないだろうか、という。

(2) 治承のつむじ風 (治承 4 年、1180 年 4 月)

自然災害で人々の家は吹き飛ばされ、多くの人々が大けがをした。地獄で吹く業風の

ようなものだ。自然災害に対して人は無力である。

(3) 福原遷都（治承 4 年、1180 年 6 月遷都、同年 11 月還都）

突然京都から摂津の難波宮へ遷都があった。天皇や大臣公卿が率先して移転していくと、朝廷に仕える人々も皆引越していった。出世からとり残された人々は愚痴をいいつつ呆然と立ち尽くすばかりだった。引越して空き家になった家は解体されて、材木は筏に組んで淀川に浮かべて福原へ運ばれた。跡地はみるみるうちに畑に変わった。新しい都へも行ってみると、整地途中であちこちに空き地があり家もまだ建っていない。人々は浮雲みたいに落ち着かない気持ちだった。結局半年後に還都になり、都はまた京都へ戻された。

(4) 養和の大飢饉（養和 1 年・1181 年～2 年・1182 年）

春と夏の日照り、秋と冬の大風や大水で不作が続いて飢饉が発生した。賀茂の河原も都大路も餓死者で埋まった。家は壊されて薪になってわずかな食糧に変えられた。寺院の仏も壊された。仁和寺の和尚が嘆いて、死者の額に「阿字」を書いて大日如来様に救ってもらおうとした。その書いた字の数を勘定すると 4 月～5 月だけで 4.23 万人に及んだ。全国規模だとどれほどの数になるだろうか。ありえないほどひどい出来事だった。

(5) 元歴の大地震（元歴 2 年 1185 年 7 月）

京都中の社寺の建物や霊廟で無事な建物は一つもなかった。崩れた塀でペシャンコになって死んだ子供の前で勇ましいはずの武士さえ嘆き叫んでいた。しかし人々は当座は慄いていたが、のど元過ぎれば忘れてしまう。

世の中には様々な困難がたくさんあって、人もその住いも全くあてにならないことが判ただろう。もしお偉方のそばに住めば雀が鷹の巣に近づくようなものでいつもびくびくし、金持ちの隣に住めばバカにされて心穏やかに住めない。狭苦しい所へ住めば火事が心配だし、辺鄙なところへ住めば不便で泥棒が心配になる。

3 草庵生活（PP26～38）

跡を継ぐはずだった祖母の家を 30 歳過ぎに出た。引越した家は前の 1/10 くらいの大きさの簡単な塀と母屋だけの家だった。50 歳で出家し大原に移った。60 歳で日野の外山^{そとやま}へ引越して一畳四方の庵を作った。家はだんだん小さくなって昔の家の 1/100 ほどになった。

その草庵では、よく散歩した。景色がよく、山中の花や実も豊かで、山鳥も多い。ここへきて 5 年過ぎた。都では人が亡くなり火事で家が焼けるなど相変わらず激しい変化が起き

ているようだが、自分がのどかで静かな日々を過ごしている。

人は、妻子、家族、主君、師匠、牛馬のために家を建てるが、私は自分のためだけに家を建てた。何でも自分でやることにしている。衣食も同様に、野の芽や山の果物、藤の着物や麻の布団など自然の産物でほとんど間に合う。

一条兼良本にはその心境を次のように書いている。命は天運に任せ、身は浮雲になぞらえることができる。そこでの人生の楽しみはうたたねと美景に包まれて暮らすことだ、と。

4 おわりに (PP38~40)

私の人生も傾いて、寿命（予算）の残りも山の端まで来た。死期に向かっている時に、あれこれの患いを抱える必要もない。

しかし、ここでどんでん返し起きる。

仏様の教えも何事にも執着するなという。だとすれば、私が庵の静かな暮らしにこだわること自体が成仏の妨げになるかもしれない。心静かに仏道を極めるために出家したが、自分の姿は坊さんに似ているが心はまだ汚れに染まっている。栖は浄名居士のまねができていたようだが、その行いは周梨槃特（しゅうりはんとく 釈迦の弟子で、最も愚かだった人）にも及ばない。

前世の因縁か自分の迷妄のせいなのかわからない。ただ念仏を三回繰り返して終わった。



鴨長明が住んだ方丈庵のレプリカ（京都下鴨神社）

4 「方丈記」が後世に及ぼした影響

「方丈記」は長い間マイナーな本だった。決して多くの人々に読み継がれてきたわけではなかった。江戸時代にも、少し後に書かれた吉田兼好「徒然草」は解説本もたくさん発行されて脚光を浴びてきたが、「方丈記」は全くもってパッとしなかった。近代以降も同じだった。しかし少ないながらもこの本に注目した人がいた。近代では夏目漱石、現代では堀田善衛である。もちろん詳しく見れば芥川龍之介も内田百閒もいないわけではないが、二人の亜流に見える。

(1) 夏目漱石の「方丈記小論 (ショートエッセイ)」

漱石は、明治24年(1891年)12月8日に「方丈記」英訳本とそのショートエッセイ「方丈記小論」を書いた。彼はまだ25歳の帝大学生だったが、お雇い外国人で英語教師のダイクソン先生から頼まれて「方丈記」を翻訳し、あわせてその評論を書いて「方丈記小論」とした。その英訳文はとてもよくできたといわれて先生から過分なお褒めの言葉を頂いたと漱石が述べたことがある。エッセイで漱石は、長明を孤独だったが、自分らしい生き方をした人で、人間嫌いで世の中に対して批判精神が旺盛だった人と評した。

(ショートエッセイの骨子)

「A Short Essay on Hojio=ki」と題されたショートエッセイの骨子は次の通りである。

- ① 文学には「天才の文学」「能才の文学」「その中間の第三の文学」の三種類があつて、「方丈記」は「第三の文学」に分類される。「第三の文学」は著者の人生観や哲学がはっきり出さる。「方丈記」はシェークスピアの「テンペスト」と同様に「無常観」が見える。その無常観は万人が共有するものではないが、特定の少数読者には十分理解される。
- ② 長明は浮世を捨てた。何故か。この世のすべてものが不安定で偶然であり、求めるだけの価値がないからだった。それなら、どうして変わりやすい自然に寛大になれたのか。何故人生や財産を捨てたように、自然も捨てなかったか。さらに長明のような人間嫌いが、ある特定の先人に興味を持ったか。これらは長明の矛盾である。しかし、だからといって私は彼の矛盾を問い詰めたりしない。矛盾があつても長明は、利益神を崇拜しなかったし、歡樂の追及もしないで外山にこもって清浄な修行と禁欲生活を過ごした人だ。それは称賛に値する行為である。
- ③ 「方丈記」は漱石にとって、前半の5大災厄事件の描写は面白いが本質的な意義を持つ

ていない。むしろ後半の遁世者としての生活と思想に重点を置いて読んでいる。特に、遁世者が最後にたどりついた自問自答による自己省察に率直な思想の独白に注目した。漱石は、自己追求の果てになお確固たる自己を持ち得なかった人間の姿があるとみた。

(漱石の英訳本)

その漱石は「方丈記」の末尾を次のように英訳している。

「方丈記」(原文)

「その時、心更に答ふる事なし。只かたはらに舌根^{ぜつこん}をやとひて 不請阿弥陀仏、両三遍申してやみぬ。・・・

月かげは入る山の端もつらかりき たえぬひかりをみるよしもがな」

漱石の英訳

Is it the effect of poverty or is it the influence of some impure thought? No answer did I give to this question but twice or thrice repeated involuntary prayers.

・・・

“Alas ! the mountain peak conceals the moon;

Her constant light’s denied to me a boon”

(貧困のせいかもしれない不浄な考えのせいかもしれない、その疑問になんら答えることができず、ただ、心ならずの祈りを2、3度繰り返すだけだった。・・・

ああ、山の頂は月を隠してしまう。(変わらぬ光などと言う恩恵は与えられない)

参考に、南方熊楠の英訳も例示する。

What answer could my soul give? None. I could but move my tongue as it were mechanically, and twice or thrice repeat involuntarily the Buddha’s holy name. I could do no more.

Alas ! the moonlight Behind the hill is hidden In gloom and darkness.

Oh, would her radiance ever My longing eyes rejoiced !

(私の心はどんな答えが出来たろうか。答えることは何もない。ただ自分の舌をいわば機械的に動かして、仏陀の神聖な御名を二度三度繰り返すことしかできなかつた。私にはそんな事しかできなかつた。

ああ、丘の向こうの月光は、暗がりや闇の中へ隠れてしまった。

おお、もしその輝きがずっと続くものなら、どんなにそれを願っている私の目を喜ばせてくれるだろう。)

長い間「不請」という語が難解で、研究者の間で議論を呼んでいた。仏教用語の「不請の友」の「不請」で請わずとも救ってくれるという説と「不承不承」のいやいやするという説に分かれていたからだ。しかし、漱石は「不請の念仏」を involuntary prayers と訳し、不承不承派で、「いやいやながらの念仏」という意味に解しているのが面白い。そういえば

南方熊楠もまた同じ不承不承派だった。

次の和歌の解釈。「方丈記」の原文は不断に光明が欲しいと願い希望を持とうとしているのだが、漱石の英訳ではそんなことは考慮されていない。むしろ南方熊楠の方が正確に歌の意味に沿っている。

さらに原文では、これまでの閑居生活で本当に修行ができたかと自省してみると、まだ閑居生活に妄執を抱いている。その妄執さが捨てきれない、未だ迷いが残っている、そこで仕方なしに念仏を唱えたとなっている。だからここには、その先に自分を明るく照らす悟りの光を希求している解釈できる。しかし漱石はそのわずかな希望も断ち切っている。その先に光明などない、希望はないと断定するのだ。ここには漱石独自の人生観が反映されているように思われる。

（漱石の近代的自我と鴨長明の無常観）

漱石の「方丈記小論」は、長明の人間嫌いには不徹底な点もあるが、隠遁生活に入ったことは称賛できる。隠遁生活で自然の移り変わりに美を見て、古人の中に理想的な生き方を感じた。しかし最後にどんでん返しがあって、その美も理想的な生き方も所詮「執着心」が生み出したものだったと否定した。だから漱石は長明には隠遁生活の結果救いなどやってこなかった、その結果生じたのは絶望的な孤独観ではなかったかとみている。

若き漱石が「方丈記」を英訳している姿は、まだ幼かった頃の漱石が一人で家の座敷に座ったまま南画に見入っていた姿を髣髴とさせる。自然やその中に存在するもろもろのものとは一体化したいと強く望んでいる漱石が見える。そのためには己を捨てて自然と一体化することが必要だ。そのためには長明のように隠遁生活をするか、芭蕉のように旅に暮らすしかないと考えたのだろう。しかし、その長明も隠遁生活に入った後も欲望や怨望を持った自己を捨てきれなかった。

同じように漱石も隠遁生活にあこがれた。長明が欲望や怨望を持った自己を捨てようと悩んだのに対して、漱石は集団の中で自己主張する「自我」問題に悩んでいた。長明が生きた時代は集団と個人の区別は希薄でまだ自我という概念がなかった。漱石が生きた近代は急速な社会発展の下で、人々が抱く欲望や不安、絶望は、集団の中の個人、全体の中の自己の問題になっていた。その近代的な「自我」問題を、漱石は「行人」で次のように説明している。

「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まることを知らない科学は、かつて我々に止まることを許してくれたことがない。徒歩から俣、俣から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから航空船、どれから飛行機と、どこまで行っても休ませてくれない。どこまで連れて行かれるかも分らない。実に恐ろしい。・・・人間全体が幾世期か後に到達すべき運命を、僕一人が僕一代のうちに経過しなければならないから恐ろしい。一代のうちならまだしもだが、十年間

でも一年間で縮めて言えば一ヶ月乃至一週間でも、依然として同じ運命を経過しなければならないから恐ろしい。・・・要するに僕は人間全体の不安を自分一人に集めて、そのまた不安を一刻一分の短時間に煮詰めた恐ろしさを経験している・・・」。小説では、ここまで考えた一郎はあとは「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るしかない」と言うが、漱石自身は神を否定するので、錯乱寸前のところで煩悶しているのである。

戯画化していうと、江戸時代までは通常の人々の生活を自然との関係で見ると、各人が自然と直接的に対峙したのでなく、間に立った信仰世界の宗教（仏教）に保護されて暮らしてきた。しかし近代になると、廃仏毀釈により仏教という宗教が消え失せたために、個々人がむき出しになり、むき出しにされた個々人が直接、自然に向かい合うようになった。不安に陥った人々は、そこで文明という武器をまとった強力な自己すなわち「自我意識をもった自己」を確立するの必要に迫られ、自然と対抗しようとしたといえる。

そうした漱石の視線で見れば、長明が隠遁生活で無常観に浸された世界に入り自然と一体になった暮らしをしたのはなるほど素晴らしい。そこで長明は自分を自然に溶け込ませてあたかも自然の一部になろうとしたのだ。しかし長明は欲望や怨望が捨てきれずに煩悶していた。しかし、漱石の場合は、隠遁生活入るといえるのは自然に近い姿で自己を見つめなおすことだった。立ち止まることを知らない科学が自分をどんどん前へ前へ押し進める。人々も皆ひたすら前進し続けている。一体この先はどうなるのか。先が見えない中で自己を維持するにはどうすればよいか。漱石にとって隠遁生活は不安にさらされている自己を再点検することだから、長明のように自分を自然に溶け込ませて終わりにできない。むしろ自然に対して声高に主張するギラギラするような自己を再発見することになったのではないか。いずれにせよ、漱石が望んだ「自己」の追及を鎌倉時代の長明に求めるのは、まだ時代が早すぎたという意味で「ないものねだり」のように思われる。

(2) 堀田善衛「方丈記私記」(1971年7月)

堀田善衛は、1945年3月10日の東京大空襲の惨状を一週間後の3月18日に、永代橋の上から眺めた。門前仲町に住む女友達の安否を確認しようとして洗足からやって来たのである。空襲跡の第一印象は、何にもなくなって平べったくなった焼跡だった。家が焼けただけでなく、普通は板や棒に移転先、疎開先を書いた紙切れがあちこちにあるはずだったが、ここにはそれすら見当たらなかった。まるで大量焚殺でその住民が全滅してしまったように見えた。「日本国の一切が焼け落ちて平べったくなり、上から下までの全体が難民になった」ようだと書いている。

彼はこの東京大空襲の惨状を「方丈記」に書かれた災厄に重ねている。堀田がひどい惨状の中を歩いて富岡八幡宮に立った時、視察に来た天皇に出くわす。天皇は八幡宮の焼け跡で机の上に地図を広げて何事か説明を受けているのだが、それは焼跡などとは関係ない一種の儀式にしか見えなかった。加えて、近くに土下座した市民がいて、彼らが涙を流しながら、陛下、私たちの努力が足らなかったために、むざむざと焼いてしまった、申し訳ありませんでした、と口々につぶやいている。あまりの驚きで、体が凍りつく思いで帰宅する間、堀田はこの大空襲も戦死も支配者の決定が起こした人災で、その総責任者が天皇である。政治は「結果責任」を問われるはずで、なぜ天皇がこんなところに大勢の権力の取り巻きに囲まれているのだろうか、と考えていた。

堀田の「方丈記」論は、第一にそれが書かれた平安末期を東京大空襲と同じように大きく転換しようとする時代の社会の様子を書いたものとみている。だから、天災もまた人災の一部であるという見方をしている。第二に鴨長明の人となり进行分析して、彼はよく言われるような「無常観の人」でなく、「孤独な偏屈者」だったことを実証しようとしている。長明は和歌に秀で音楽を愛した秀才だったが、激しく流動化する社会からドロップアウトした。彼はフットワークがよくあちこちに顔を出すジャーナリストのような人で、最後まで俺はここから見ているぞーと叫び続けた人だった、とも指摘している。

ア 東京大空襲も京都大火も「世の乱るる瑞相」のしるし)

堀田は1945年3月10日の東京大空襲の惨禍と平安末期の天災の被害状況を比較している。

(東京大空襲)

東京大空襲は本所深川辺りの被害がひどく、死傷者 17 万余人に及んだ。永代橋からその焼跡を見ると、門前仲町、洲崎弁天、木場の方まで実に何にもなかった。一切が焼け落ちて平べったく、ずっと先の荒川放水路までも見えるようだった。普通焼け跡には移転先や疎開先を書いた板切れなどがあちこちにかかるが、ここでは何もなくてあたかも生体反応を感じさせない街になっていた。大量焚殺で住民が全滅した光景にみえたのである。

(五大災厄)

これに対して、1177 年の京都大火は、街の東南にあった病人が住むバラックから出火し、折からの強風であれよあれよという間に火が燃え広がった。火焰は空に昇るのでなく、地面に叩きつけるように吹き付け、立ち上る煙に火の赤さが反射して町中が昼のように赤くなったと描写している。風にあおられて吹き切られた炎が飛ぶようにして 2,3 町先へ移っていく。「その中の人うつ心ならしめや」と思った。煙にむせて倒れ、炎にまかれて死者数千人、焼失家屋は京都全体の三分の二に及んだ。

これだけではない。3 年後の 1180 年のつむじ風もひどく、「地獄の業風もさもあらん」と思われるほどだった。1185 年には京都大地震も発生した。地震の時は家の仲も外にもいることができず、「羽なければ空へも上がるべからず」で、ただ震えるばかりだった。さらに、天災だけはなかった。つむじ風が吹いた 1180 年には、突然、福原遷都が行われた。半年後に還都になって元のさやに戻ったが、ひどい混乱だった。

政治面でも、後白河上皇院政、平清盛太政大臣、僧俊寛流刑、頼政挙兵、清盛死去、木曾義仲の入京と戦死、一の谷の戦い、壇ノ浦戦、頼朝義経抗争、頼朝総追補使、義経死去などの事件が続いていた。

これらの天災と人災が入り混じって社会全体が激しく動揺する状況を、長明は「世の乱るる瑞相」と呼んだ。そして大空襲下の昭和の日本もまたそれと同じだった。二つは 800 年離れているが、平安末期の京都と戦争末期の東京はともにこの世の終わりの様相で、「古京はすでに荒れて、新都はいまだ成らず、ありとしある人は皆浮雲の思いをなせり」の有様だった。

イ 日野山中へ隠遁後も「俺はここから見ているぞ」と叫ぶジャーナリスト

(長明はジャーナリスト)

長明は「方丈記」を建暦 2 年 1212 年、57 歳頃に 20 歳～30 歳頃の話を書いている。驚かされるのは、にもかかわらず話が正確でその描写も的確である。なぜかという、彼が徹底した現場主義者だったことが一つ。もう一つは好奇心が旺盛で何事にも物見高い人だったことがある。京都大火の時には火元になった樋口の富の小路まで出かけた。福原遷都では誰かに用事があってもないのに難波福原まで出かけて行ってその街をジーとみて

きた。こうして現場を実際に見て知っている人の記憶は他の誰よりも正確になる。また、これといった必要もなかったのに、鎌倉まで出かけて行って将軍源実朝に面会している。何の用事があったか、何を話してきたかもわからないが、ここに長明の異様に軽いフットワークと物事に対する徹底した好奇心の高さを見ることが出来る。今風のジャーナリストのようである。この物見高さは彼の高い教養の反映でもあるが、それ以上に、社会を全体的に把握しようとして常に一步高みの視点から眺めようとしていた姿勢のせいと思われる。

(ドロップアウトした多芸多才な長明)

その長明は当時の貴族社会からドロップアウトした人である。下鴨神社の神官の家に生まれながら、その地位を従弟に奪われた。しかし彼は詩歌も管弦もあの時代の貴族たちの芸事ならば特別な努力や精進などしなくてもこなす力を持っていた男だった。堀田善衛はその例として、錚々たるメンバーだったが遊び仲間を集めて鴨の某場所で音楽パーティーを開いたとき、長明は調子に乗って「琵琶の啄木」という禁断の曲を演奏した事例をあげている。これは家伝の秘曲でみだりに演奏すると重罪になるほどのものだった。それを長明はやってしまった、だから後日後鳥羽院に呼び出されて処分を受ける大スキャンダルになった。

また、千載和歌集に1首、新古今集和歌集に10首の歌が採択され、和歌所寄人になって歌会で春夏秋冬+恋+旅のテーマで各一首ずつ詠むという課題をさっさとやってしまう実力を持っていた人だった。しかもそれをやり終えた後に「ただあわれ無益のことかな」とさりと言いのける男でもある。

ウ 栖に特別な関心を寄せる長明

長明が建築にただならぬ関心があったことは有名である。なにせ、「方丈記」冒頭の名文は水や泡の話をしているのでなく、「・・・世の中にある人と栖と又かくのごとし」で結ばれて、人と栖の話として受けているのだ。

そういえば、長明は昔の家は大きかったが、神官職の見込みがなくなって次に引越した家はその十分の一になり、出家して住んだ大原の家は百分の一になり、日野の庵はとうとう上場一間の家になったと、家にこだわる話を延々と続ける。また、日野山中の庵の描写などは具体的かつ簡潔で今日の我々にも容易に姿がわかる。どうも彼は建築設計に才能があったようだ。長明が栖にたいして家はその人の生き方を示すものの一つと考えているように思われるのだ。一丈四方の簡素な庵ももしその場が嫌になればチョコット畳んで荷車へ乗せれば簡単に移動できると得意げに言うからだ。

長明は栖を人の人生を映す鏡みたいなものと考えている。人生を具体的な形であらわすも

のが住まいである。だから住まいにはその人の価値観が反映している。長明自身は人生と同様に住まいのはかなさを体験してきたことから考えて、山中での庵の生活が理想だと考えたのであろう。

しかし長明は、山菜をとり、裾野の田んぼで落ち穂を拾う、桜や紅葉を眺めて、わらびや木の実を拾ってくるなど山中生活をかなり美化して書いている。たぶん実際には、いかに方丈とはいえ一人暮らしでは、炊事やその後片づけ、洗濯、水汲み、薪拾い、食糧調達、掃除などやらねばならぬことが山のようにあったに違いない。ひょっとしたら炭づくりまでしたかもしれない。しかしそんな日常のよきなしごとを書きだしたら「方丈記」は根底から崩れてしまっただろう。

だから、この「方丈記」全体に貫かれていることだが、五大災厄が書かれても源平の戦争、朝廷一家のトラブル、下鴨神社内部の人事抗争などは全く除かれている。注意深く雑事を取り除いた張りの効いた緊張感が音楽のようにリズムカルな文体で流れる様子は読む人の心を打つ。

にもかかわらず、長明は続けていう。「いうまでもなく、私よりももっと深くものを考え、よく知っている人には、この山中の景気つまり興趣のことはおわかりのことでしょうが…」と。堀田氏はこの長明の言い方に、前段だけでもう過不足ないと思うのだが、「いわむや…」と付け加えるとどうにもトゲが残る言い方になっている、という。出家して世を捨てて、60歳になっても、いつまでたっても、とげの残る言い方をする男だったというのだ。

5 「方丈記」が現代に教えるもの

(長明は数寄者)

長明は、下鴨神社で将来はエリートになることを想定した子供時代を送った。当時の英才教育は和歌と琵琶の教育で、和歌を当代トップの俊恵、琵琶も中原有安から教わった。その甲斐あってか、若いうちから風流人（数寄者）だった。その長明が父の跡を継いで禰宜になっていれば今の長明はいなかっただろう。30歳ころにドロップアウトした長明は、自分のことを「みなじご」と呼んでいた。その長明も晩年に「方丈記」を書くようになるまで、あたかもジャーナリストのように周囲に目を光らせて、何度が現場を訪れながら、ものを書き、考えていた。実際に昔の文学者は一人一作と言えるほどで、あれこれの著作を残したりしなかった。せいぜい日記を加える程度だった。それに反して長明は、「みなじご」でありながら、若くして音楽の才能をだけでなく、月詣集、無名抄、発心集、方丈記も残した多芸多才な「数寄者」だった。

(「方丈記」のテーマ)

「方丈記」は、冒頭で川の流れや泡に譬えて「世の中の人と栖」を変わりやすくはかないものとみているとおり、「人の生き方と住い」について考える論文である。これまで見てきたように、「方丈記」は、平安末期から鎌倉に至る時代の激動期を生きた鴨長明の実体験を踏まえて、栖のあり方から人の生き方を検証したものだった。検証の結果、長明は草庵生活しかないと結論付けようとするが、最後に大どんでん返しがあって確かなことはわからないと言って終わる。

人生と住いの問題を検討するために、長明は、当時の誰もが関心を持っていたらと思う源平の争乱ことも将軍源実朝に面会した話も日野山中の草庵生活の日常のゴタゴタ話もすべて断ち切って、要するに住まいと人生に直接関わらないものは全部切り捨てている。このことによって「方丈記」は抑制が効いた論理的なトーンが全体を貫いているために、今日に至るまで大勢の人に読まれてきたと思われる。今でもそうだが、論文を書くときも講演するときは話す事柄をしっかりと限定し、しかも簡潔に説明することが求められるが、「方丈記」はその見本である。

(自分の心体に合わせて作った繭のような栖の中の閑居生活記)

「方丈記」を読むときに我々が一番感じることは、いつか俺もどこかに方丈の庵を作って逃げ出したいものだと思わせることだ。ただ逃げ出すのでない。月を見ながらギターなども弾けるといい、うまい酒があればもっといい、などと妄想させるのである。そんなアー

テストイックな閑居生活を日野の山中で長明は暮らした。

ところで、「方丈記」における長明の強みは、テーマに沿った論旨や登場する事柄が実体験に基づいてしっかり思索されている点にもある。無常な世の中をどう自分が生きてきたか、それは正しかっただろうかと問い直している。その人生を振り返る時に長明は「住まい」にスポットを当てた。人生を具体的に目に見える形で示すものが「住まい」になっている。長明は人の価値観は「住まい」に表われると考えていた。人と同じように住まいもはかない。五大災厄をみれば、さしも危なき京中に家を作るとて寶を使い心を悩ますことなどは「すぐれてあぢきなくぞ侍る」事態であるのは一目瞭然だろう。さらに権力者のそばに住めば雀が鷹のそばにいるようなもので自分の行動さえまならないし、金持ちのそばに住めばいつも忌々しい思いをさせられるだろう。住いがかくもはないことが判れば、草庵生活が理想なる。だから日野山中に庵を作って住んだ。魚は水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。閑居の気味もまたかくの如し、住まずしてたれかさとりむ」なのである。

だから、草庵生活の拠点になった日野山中の庵は長明の人生観を表すものだった。その庵の様子は次のように描かれている。

庵の東に三尺くらいの庇をつくり、柴をくべて炊事ができるようにした。南側には竹の簀子を敷き、その西側に關伽棚（仏前の棚）を作り、北側に衝立を隔てて阿弥陀様の絵を安置し、そばに普賢菩薩を置いて、前に法華經の經典を置いている。東の端にワラビのほとろ（ワラビの穂が伸びたもの）を敷いて寝るための床にした。西南に竹のつり革黒い革かごを三つ置いて和歌、管弦。往生要集などの抜書きを入れてある。傍らにはことと琵琶が一張づつ立っていて。いわゆる折琴、繼琵琶がそれである。(P29)

出家者の部屋だから全く簡素である。しかしそれでも、長明自身がアーティストの一面を持っていたことを反映して、暮らしに中の和歌や音楽、書物が一緒であって、芸術的な暮らしをしていたように思われる。その庵を「老いたる蚕の繭を営むがごとし」と言って、すべて捨て去り自分の体や心に合わせるように工夫して作り上げた繭のようだと言う。この自分の体や心に合わせて造られた繭のような庵暮らしに現代人も憧れる。

鴨長明

方丈記

現代語訳

1 序文～川の流れは絶えずして、しかも本の水にあらず

川の流れはとどまることがないが、同じ水が流れているのではない。淀みに漂う泡も割れたりくっついたりして、長く一か所に止まっているものはない。

世の中のひとと^{すみか}栖も、また同じようなものだ。きらびやかな都で、軒を並べて家々が立ち並んでいる。身分の高い人も低い人の住まいも親から子へと代々引き継がれていくものだが、それは本当かと調べてみると、昔からあるという家は少ない。去年壊れて今年新たに建てた家や、昔は^{おおいえ}大家だったのが今は落ちぶれて^{こいえ}小家になっている。そこに住む人も同じである。都会には人の数も多いが、古くからいる人は20人、30人のうち1人か2人だけだ。朝のうちに誰かが死んだと思ったら、その日の夕方に赤ん坊が生まれるのが世の習いで、まったく、さっきの水の泡によく似ている。

生まれて死ぬ人がどこから来てどこへ行くのかということとは知らない。また、仮の住まいについても誰のために心を悩ませたり、何のために心地よいものにするかも知らない。そこに住む人が栖が無常を競う様子は、朝顔の露に似ている。あるときは露が落ちて朝顔の花だけが残るかもしれない。また残っても朝日を浴びて花は枯れるかもしれない。また花がしおれて露だけが残ることもある。露が残ったとしても夕方まで消えずに残ることはない。

2 五大災厄

(1) 安元の大火（京都大火）～風に堪えず吹き切られたる焰飛ぶが如く

私はもの心ついてからかれこれ40年余の間に、世の中の不思議な出来事を何度も見てきた。たとえば、去る安元3年（1177年）4月28日のことかと思うが、風が強く吹いてうるさいほどだった夜の亥の刻頃（8時～9時ごろ）になって、京都の東南方向から火が出て、西北へ燃え広がったことがある（京都大火）。火の勢いは最終的に、朱雀門、大極殿、大學寮、民部省まで火が移って、一晩でみんな焼け落ちてしまった。

^{ほもと}火元は樋口富の小路で（樋口小路と富小路の交わる辺り）、病人が臥せっていた粗末な家から燃え出たという。強い風にあおられて火が移っていくうちに、火事は扇を広げたように末広がりに広がった。火から遠く離れた家には煙が押し寄せ、火が近い家は炎が地面を焼くほど吹きつけた。空にすさまじい勢いで灰が舞い上がり、灰に炎が映って一面が真っ赤

だった。さらに風に吹きちぎられた炎が、まるで火が飛ぶように一、二町を超えて移っていった。その中で逃げ惑う人々は生きた心地がしなかっただろう。なかには煙に巻かれて倒れたり、炎に目がくらんで焼け死んだ者も多かっただろう。自分の身ひとつでかろうじて逃げきれたが、家からは何も持ち出せなかった人もいただろう。

あらゆる財産がみな灰になってしまった。その被害額は見当もつかない。この火事で公家屋敷が16棟も焼けた。ほかの人々の家の被害は想像もできない。被害は京都中の3分の2に及んだという。男女あわせて死者数十人、焼死した馬や牛などは数えだしたらきりがない。人の営みはみな頼りにならないものなのに、こういう危険な京都市内に家を作るといえるのは、大金かけてあれこれと心配事ばかりを増やすもので、無理無駄の極みではないかと思う。

(2) 治承のつむじ風～かの地獄の業の風なり

治承4年(1180年)4月ごろ(4月29日)、京極の中御門の辺りで大きなつむじ風が発生して、六条辺りまで吹き荒れたことがある。三、四町に渡って吹きまくり、その中に入った家では大きい家も小さい家もみんな壊れた。そのままぺしゃんこになった家もあれば、桁や梁だけ残した家もあった。門を吹き飛ばして四、五町先まで運んでしまったり、垣根を吹き飛ばして隣家との境が無くなってしまったところもあった。同じように家の中の資材もみんな空へ吹き飛ばした。ひわだなど屋根のふき板の類も、冬の木の葉のように強風に舞い上がりバラバラになった。塵を煙のように舞い上げるので、目も開けられず何も見えない。音ももの凄く、近くにいる人の声も聞こえない。あの地獄で吹くという業風もこれほどかと思うほどだった。家が壊されるだけでなく、家の修復中に大怪我する人も数えきれない。このつむじ風も西南方向へ移動して行って、大勢の人をさんざんに嘆かせた。つむじ風はいつでも吹くが、こんな惨事が起きることがある、ただごとではない。吉兆凶兆のお告げ(前兆)ではないかと心配する者もいた。

(3) 福原遷都～古京はすでに荒れて、新都はいまだならず

それから治承4年6月頃に、いきなり遷都があった。まったくもって予想外のことだった。だいたい平安京の始めを聞くと、嵯峨天皇の時代に都に定められて以来、すでに四百年余りがたっている。移転する理由もなく、簡単に移転などすべきではないで、世間の人々は途方に暮れて不安げな顔で心配しあったのは尤もなことだった。しかし、あれこれと言う甲斐もなく、天皇さま始め大臣公卿たちは皆摂津の難波宮へ引っ越していった。世の中の動きに従う役人たちは誰一人として故郷に残らない。出世第一で上司のおかげに頼る人たちは一日でも早くと皆で引越し競争をしていた。他方、時勢に乗り遅れて出世から取り残

されて何の期待ももたない人たちは、愚痴をこぼしながら茫然と立ち尽くすばかりだった。豪華さ較べをしていた人々の家も住む人がいなくなって日々荒れて行く。家は解体されて、その材木が淀川に浮び、跡地はみるみるうちに畑になっていった。(遷都で)人々の心も皆変わり、ただ馬の鞍を重宝するようになった。牛車を使う人がなくなった。西南海(瀬戸内方面)の所領の人气が上昇し、逆に東北の荘園が不人気になった。

その後、機会があったので、摂津の国の新しい都へ行ってみた。その土地の有様を見ると、土地はとにかく狭くて、区画もできていない土地だった。北側は山に向かって高く、南側は海に近く下っている。波の音がいつも騒々しく、ことに潮風が強い。宮殿は山の中だから、昔の「木の丸殿」と呼ばれた宮殿もかくやと想像させて、なかなか悪くないようにも思われた。それにしても、連日京都中の家を解体し、淀川を埋め尽くすほどの筏を流して運び出した家はどこに建っているのだろうか。今なお空地が多く、建築された家が少ない気がした。ふるさとの京都はすっかり荒廃しているのに、新しい都はいまだできていない。あらゆる人々が皆、浮雲みたいに落ち着かない気持だった。

もともとここに住んでいた人々は土地を失って困り果てて、新たに越してきた連中は土木工事の煩わしさを嘆き合う。ふと道の傍を見ると、牛車に乗るべき貴族が馬に乗っているし、冠をつけてまともな衣を着るべき連中が気楽な直垂(ひたたれ)姿で歩いている。都の優雅さがあつという間に崩れて、みんなが田舎者の武士のようである。これは乱世の予兆だと聞いたが、日が経つにつれて、世の中が何となくソワソワしてきて、人心も治まらず、民衆の心配事も決して理由がないわけではなかった。結局、その年の冬に都はもとの平安京へ戻った。

しかし戻ってみても、すでに解体した家をどうしたら良いのか。すぐにもとどおり建てられるわけもない。どこかで聞いたが、昔のすばらしかった時代には、天皇さまが憐れみの心を持って国を治めたと言う。御殿の屋根から芽が出て修理しなかった。人民の家々から炊飯の煙が上がらないとご覧になると、租税も免除されたそう。まさにこれこそ民衆に恵みを与えて世の中の人々を助けるためのご配慮であった。今の世の中の有様について、少しは昔を見習ってもらいたい。

(4) 養和の大飢饉～世の人みなけいしぬれば小水の魚の警えにかなえり

それから養和の頃だったか、古いことでよく覚えてないが、2年間、世の中が飢餓に陥って驚くべきことがあった(1181年～1182年)。春と夏は日照りで、秋には大風、大水などよくないことが続いて、米などの穀物がことごとく実らなかった。むなしく春に耕し夏に苗を植えることはしたが、秋に作物をかって冬に収穫する喜びがなかった。これにより人々

は土地を捨てて国を出たり、家を捨てて山に住むようになった。さまざまな祈祷が始まり、普通では見られない秘法まで行われたが、まったく効果がない。京都の習いは何事もその源泉は田舎頼みであるのに、輸送されるものが何も無い状況だから、みんな、体裁を取り繕おうともしなくなる。困り果てて、いろいろな宝物を片っ端から捨てるみたいな値段で売ろうとしても、目をとめる人さえいない。たまたま売れても、食べ物が重視されて、金が軽くなり粟が重くなる。乞食が道に大勢現われて、生活に苦しむあえぎ声ばかりが聞こえてくる。

前の年（養和元年、1181年）はそんな厳しい有様で暮れた。新年は立ち直るだろうと思っていたが、さらに疫病が発生して、とにかく悪くなるばかり。みんな飢え死にして行く中で、毎日毎日、苦しみつつ生きてゆくさまは、「小水の魚」^{しょうすい}（干上がって行く川で、魚が何の楽しみもなく、ただ死を待つようなもの）の喩のようだった。挙句には、笠をかぶり、足を隠したけっこうな身分のご婦人までが食べ物を求めて家ごとに乞い歩くありさまだった。このようにみすぼらしい人々がとぼとぼ歩いているかと見ているうちに、いきなりバツリ倒れてしまう者もあって、塀の前や道ばたに餓死者が数え切れないほど倒れていた。死体を片づけることもできないので、死臭が充満し、遺体が腐って行くさまには目も当てられないことが多かった。ましてや河原などには馬車がすれ違う道さえないほど死体だらけだ。賤民（しず；身分が低いもの。普段はたくましく生きている底辺の人々）や山賊（山がつ；獵師などで山中に住む身分が低い者）でさえ気力をなくした。

薪までも乏しくなってきた、頼るところの無い人たちは、自分の家を壊して薪にして街へ出て売っているが、その売上金も一日の命を支える食事代にすら足りないという。けしからんことに、こうして売られる薪の中に、漆や、銀箔、金箔のついた木の破片が混ざっていることがあり、これは何だと聞くと、古寺から盗み出した仏像や、法具、宝物の類をぶっ壊したものだと言う。こんなものを見るなんて、まったく、ひどい世に生まれてしまったものだと思う。

ひどい話はほかにもある。たとえば愛しあった男女は、その思いの深い方が先に死ぬという。なぜかと言えば、「自分よりは相手」と男も女も思い詰めて、愛おしいと思う相手にやっとの思いで得た食料を食べさせようとするからである。だから親子であれば決まって親が先に死ぬ。母親が死んだことも知らず、おっぱいに吸い付いたまま赤ん坊が眠っていることもあった。

こういう時、^{にんわじ}仁和寺の^{りゅうぎょう}隆 曉という坊さんが、あまりに多くの人々が死んで行くことを嘆いて、死者を見るたびに死者の額に「阿字」を書いて、大日如来に救ってもらおうとされた。その人数を知りたいと思って、4月、5月の分を数えると、京都市中の南北は一条から九条の

間、東西は朱雀大路から京極通の範囲で、道の傍らにあった死者は4万2300余りだったという。無論、この2ヶ月の前後に死んだ人も多く、また河原町、白川町、西京地区など町外れの死体を加えれば、本当に、数え切れないほどであったろう。ましてや七道諸国（東海、北陸など全国規模のこと）でみれば、いったいどれほどの人が死んだのか際限もない。最近だと崇徳天皇の時代の長承の頃にもこういう飢饉があったと聞くが、それはよく知らない。目の前で見た「養和の飢饉」はあり得ないほどにひどい出来事だった。

(5) 元暦の大地震～羽なければ空をも飛ぶべからず

それからまた同じ頃と思うが（元暦2年（1185年7月））、大地震（京都大地震）があった。その様子は尋常ではなかった。山が崩れて川を埋め、海では津波が陸地を水びたしにした。地面は裂けて水を噴き出し、大きな岩も砕けて谷底へ転げ落ち、海岸の舟もどこかへ流されて、道を歩いていた馬でさえ足の置き場が狂ってしまうほどだった。ましてや京都付近では、あちこちの社寺の建物や霊廟で一つとして普通に建っているものがなかった。あるものは崩れ、あるものは倒れてその埃がもうもうと立ち上がって煙のようだった。地震の揺れで家が壊れる音は雷が落ちたように思われた。家の中にいけば潰されそうになる。走り出れば、地面が割れて裂けている。羽がないので空へ上ることもできない。龍でないので雲へ昇ることもできない。世に恐ろしいことはたくさんあるが、最も恐ろしいものは地震のほかにはないと感じた。

（一条兼良本、嵯峨本に掲載された哀話― その中に、6つか7つの武士の子供が、屋敷堀の下にままごと小屋をつくって無邪気に遊んでいたが、急に堀が崩れて埋められ、見るも無残にぺしゃんこに潰され、二つの目が衝撃で一寸（2,3センチ）も飛び出したのを、両親が抱えて大声をあげて嘆き悲しんでいることがあり、ほんとうに哀れであった。子供のためには、勇ましいはずの武士でさえ、人目をはばかりを忘れて嘆き叫ぶのは、可哀そうだが尤もなことだと、興味深く見ていた。）

こんなに激しい地震はしばらくして止んだが、しばしの間余震が続いた。世の中に普通にあって驚かされる地震は日に20～30回ほど続いた。十日過ぎ、二十日過ぎたころになって、次第に間隔があいて、一日に4,5回、また2,3回、あるいは二日おき、三日おきになって、地震の名残はおおよそ3ヶ月くらいも引き続いただろう。

この世界を構成する四大種（地、水、火、風）の中で、水、火、風は、普段からいつでも災害を引き起こすが、大地になると特別な変事は起こさなかった。昔、斉衡年間頃の事と思う。大地震があって東大寺の大仏様の髪の毛部分が落下するなど、ひどいこともあったようだが、それでも今回の大地震には及ばないだろうと思う。人は皆人生のむなしさを口にして

少し心の濁りが薄らいでいくように見えたが、月日が過ぎて年も越えてしまうと、地震の話題も口にのぼらなくなった。

世の中に困難が多くて、自分や住まいが頼りにならないことはこんな感じで明らかだ。ましてや、住んでいる場所や身の程に応じて、心を悩ますことは数え切れないほど多い。自分が下層民であるのに出世してお偉方の身近にいる者は、悦びは大きいかもしれないが、心から楽しむことにはできない。悲しい時にも声を上げて泣くことはできない。自分の行動すら思うままにならず、日常の所作一つについてもビクビクする。その様子は喩えると雀が鷹の巣へ近づくようなものだ。もし貧乏人で金持の隣に住んでいると、朝晩の外出、帰宅時に妻子や召使いが自分のみすぼらしい衣装を恥じて隣をうらやましがる一方、隣の人たちが貧乏人どもを馬鹿にしてくる様子を聞いて、主人の心はいつも忌々しく思い、心おだやかに過ごすことなどとても出来ない。

また、もしも狭苦しいところに家を持つと、近所で火事が起きると被害は逃れようがない。辺鄙なところに広い家を持てば、行き来が不便なうえに盗賊の危険も多い。また勢力家は欲深く飽くことを知らないので、頼る人がいない独り者は小馬鹿にされがちだ。財産があれば心配事が多く、貧しければ困窮が切実である。誰かの庇護下に入れば、その人の言いなりになって自由になれないし、誰かの世話をしてやろうとすれば利用されるだけ。世の流行に乗れば息苦しい。また流行に乗らないと変人扱いされる。いやはや、どこに身を置き、どんなふう生きていけば、この身に宿る魂に平和が訪れるのだろうか。

3 草庵の閑居生活

さて、(ここらで私自身について語る。)私のはじめ、父方の祖母から受け継いだ屋敷に長く住んでいた。だが、そのうちに親戚もなくなって落ちぶれて、我慢することが多くなって、ついに家を手放すことになった。30歳を過ぎたころに、自分の趣味に合致する小さな家を建てた。その家と昔の住まいを較べると、大きさは10分の1くらい。ただ母屋だけを構えたもので、立派な建物ではなかった。簡単な塀はつけたが、門を建てる費用もなかった。竹を柱にして牛車止めにした。雪や風が吹くたびに、倒れそうで危なっかしい建物だった。場所が河原に近かったので、水の被害や泥棒の危険も多いところだった。いつも別世界を心に思っ、悶々と日を送ること30年あまり。その間、いろいろな失態をして、ようやく、自分に運の無いことを悟った。そして50歳の春に、やっと家を出て出家した。もともと妻子も無かったので、捨てがたいしがらみもなかった。官職も禄もなかったので、こだわりは何も無かった。私は虚心になって大原山の雲のあたりへ寝転がり、さらに何年かを過ごした。

こうして60歳になり、私の命も間もなく露となって消える頃になって、終の棲家を建てた。ちょうど旅人が一晩明かすために小屋をつくり、年老いた蚕が繭を作るようなものである。これを威勢の良かった中期頃の家と較べると、100分の1にも及ばない。あれこれと言っている間に、年々老いてきて栖はだんだん狭くなる。

その家の様子は世間に普通にあるものには似ていない。広さはわずかに一丈四方（四畳半）で、高さも7尺（2m）にも足りない。場所をしっかりと決めたわけではないので、基礎固めもしない。土台をつくり、簡単な屋根を葺いて、柱の継ぎ目を掛け金で止めた。もし居心地がよくなければ、気軽に他へ引っ越しするためである。この家を建てるのに多少の苦勞があっただろうか。せいぜい荷車2台分の荷物しかない。荷車に力を使った以外には何にも要らなかった。

（草庵の様子）

今、日野山の山中に引きこもって以降、東側に三尺余りの日よけをつくり柴を焚いて炊事をする。南側に簀子を敷いてその西側にあかだな閼伽棚（仏前の棚）を作り、北に寄せて衝立を隔てて阿弥陀さまの絵を置き、そばに普賢の絵をかいて前に法華経を置いた。東側の角に穂が出たワラビの束を敷いて布団の床にした。西南側に竹の吊り棚をかけて黒い革の籠を三つ置いて、それへ和歌、管弦、往生要集などの抄物（抜き書きしたもの）を入れた。傍らには琴と琵琶が各一張ずつ立てかけてある。いわゆる折り畳み式の折琴と柄が取り外しできる継琵琶である。仮住まいの草庵の様子はこんなところである。

その場所の様子をいうと、南側に樋がある。岩を使って水を溜めている。林が近いので焚き付けの木には不足しない。その山はおとわやま音羽山という。まさきの蔓が覆っている。谷には木が茂っているが、西側は開けている。落日を見て浄土を連想することもできないわけではない。春には藤の花が波のように咲いて、紫雲のように見える。死んだら仏様が西方浄土から紫雲に乗ってお迎えに来るだろう。夏にはホトトギスの鳴く声が聞こえる。聞くたびに死んだ時の道案内を頼んでいる。秋にはヒグラシの声が耳を満たす。はかない此の世を悲しんでいるように聞こえる。冬には雪に感傷的になる。雪が積もっては消えていく様子は人の罪障に譬えることが出来そうだ。

もしも念仏を唱えるのが気が進まず、お経を読むのに気乗りしないときは、勝手に休んで、怠ければいい。それを止める人もいないし、恥じるべき相手もない。無理に黙っているわけではないが、一人で暮らしていると口の災いもなくなる。しっかり戒律を守ろうと努力しなくても、俗塵にまみれることがないので戒律を破る必要もない。

満誓が世の中を「跡の白波」と詠じたように、「跡の白波」に思いを寄せて、この世のはかなさを思う朝には、岡の屋を行き交う船を眺めて、満沙弥（満誓）が味わった風情にあやかり、もし風が桂の葉を鳴らすような夕べには、白居易の琵琶行にある長江を思い出して源経信の琵琶曲を弾いてみるといい。もし興が乗れば、何度でも松の響きにあわせて秋風樂を奏で、水音にあわせて流泉の曲を演奏する。腕は悪いかもしれないが、誰かに聞かせるわけでもない。一人で演奏して一人で謡い、自らの心を満足させるだけである。

（散歩）

麓に一軒、柴葺きの小屋がある。この山の山守（山番）が住んでいる。そこには若者がいて、時々互いに訪問しあう。退屈な時には、彼を友にして遊び歩く。彼は16歳で私は60歳。年齢差は大きい、心を慰められるのに年齢は関係無い。

あるときには茅花（はつはな）を取り、岩梨を収穫する。珠芽（むかご）をとり、芹（せり）を摘む。また麓の水を溜めた田で取りこぼしの落ち穂を拾って、穂組をつくって乾かす。天気の良い日には山へ登り、遙かにふるさとの空を眺めて、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。ここは景色の良い場所で、所有者もいないので、自分の心を慰めるには差し支えない。歩くことに不安は無いので、遠くへ行きたいと思った時には峰続きに炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間寺へ参詣したり、石山寺へお参りする。あるいは栗津の原つばを超えて歌人蟬丸の庵跡を訪れたり、田上川を渡って猿丸太夫のお墓を尋ねることもある。その帰りには、折につけて山桜を見たり紅葉の見所を探したり、ワラビを摘んだり木の実を拾って、家の仏前にお供えしたりお土産にする。

静かな夜には、窓から見える月に旧友のことを思い、猿の鳴き声に涙ぐむ。草むらの螢は遠くの魚を獲るかがり火と見分けがつかない。明け方の雨は自然に木の葉を吹き払う嵐に似ている。山鳥がほろほろと鳴くのを聞くと、死んだ父や母が呼んでいるかと思い、山の鹿が馴れて近づくようになったのを見て、俗世から離れたことを実感する。時には炉の埋め火をかきおこして寝覚めの友にする。大して大きな山ではないので梟の鳴き声をしみじみ聞くと、山の有様はその時々味わいを見せてくれて味わい尽くすことはない。まして、世の中を深く考えて、よく知っている人のためには、これだけに限られるものでもない。

（世の人の栖を作るなら必ずしも事のためにせず）

ここに住み始めた当初は、ほんの一時のことと思っていたが、気がつけば5年も経った。仮の住まいもだいぶ古びて、軒には落葉が積み重なり、庵の土台に苔も生えた。何かの機会に都の事情を聞くと、私がこの山に引きこもって以降、高貴な人たちがたくさんお亡く

なりになったという。ましてそういう話題にのぼらない人たちがどれだけ死んだかは知る由もない。たびたびの火事で焼け落ちた家もどれほどあるだろう。そんな中で、私の仮の庵だけはのどかで何の心配もなく保たれている。すこし狭いとはいえ、夜に寝る床はあるし、昼に座るところもある。自分一人が過ごすには不足はない。ヤドカリは小さい貝を好むものだが、それは自分のことをよく知っているからだ。ミサゴは荒磯にいるが、それは人を恐れるからだ。私も同じである。身の程を知り世の中を知っているのに、何も願わず、人とも交わらず、ただ静かな暮らしを望みにして、憂えの無い生活を楽しみにしている。

世の中の人誰かが住いを作る決まりがあるのは、必ずしも自分のためだけではない。人によっては、妻子、一族のために作り、あるいは親しい人や友人のために作る。あるいは主君や師匠、はたまた自分の財産や馬、牛のためにさえ家を作る。私の場合は、自分のために小屋を建てた。どうしてかという、世の中の習慣とこの身のありさまからして、連れ合う人もいなければ、頼りにすべき下男もない。例え広い家を建てても誰かを泊めたり、誰かを迎えるわけでもない。

(人の友たるものは)

そもそも人にとって友だちというのは、金持をありがたがり、親しい間柄の者を優先する。必ずしも情があるとか素直なことを愛しているわけではない。だから私は音楽や花や月を友だちにしたい方が良く思う。誰かに雇われている人は賞罰がはっきりしていることを好み、しかも手当をたくさん出す主人をありがたく思う。仕事がたいへんで、もうやっつけられないと口にはするが、単に暇なことを願うのでなく、ただ自分をそういう奴隷身分に置きたくないたいのである。もしもすべきことがあれば、私はみんな自分でやってしまう。簡単でないこともあるが、人を雇い、その働きぶりを監視しているより、よほど楽だ。歩く必要があれば、自分の足で歩く。苦しい時もあるが、馬の鞍だ牛車だと悩むより、よほど良い。今の私は自分の体に二つの用をさせている。手は召使い、足は車でどちらも私の意志をよく汲んでくれる。また自分の心身のことをよく把握しているのに、苦し時は休み、元気な時は使う（働かせる）。働かせるといっても何度も働かせるわけではなく、気が進まないときでも心を動揺させることはない。何と言ったらよいか、よく歩き、よく働くことは健康に良いことに違いない。どうしてだらだらと過ごすことなどできようか。そもそも人を悩ますことは悪いことだ。どうして人の力を借りようとするのだろうか。

(衣食の類もまた同じ)

衣食の類についても同じことだ。藤の着物も麻の布団も、ありさえすれば肌を十分に覆ってくれる。野に生える茅（芽花）や山の果物も、あれば何とか命をつなげる。誰かと交際

するわけではないから、自分の姿を恥ずかしくも悔しいとも思わない。食料が少なければ自分が力がなかった報いを甘んじて受ける。こういう楽しみを今、金持ちに対していつているのではない。ただ、わが身一つにとって昔と今とを較べているだけである。

(一条兼良本一 大体、遁世し世捨て人になってから、私には不満も心配事も無い。命は天運に任せて、惜しまず、厭わず、この身を浮雲になぞらえて、何ものも頼りにせず、何が不足するとも思わない。この余生の楽しみはうたた寝の枕に尽きるし、生涯の望みもおろおろの美景に残っているように思う。)

(それ三界はただ心一つなり)

きっと三界（この世）の物事は心次第である。もしも心が平穏でなければ貴重な象や馬、宝もつまらないし、豪華絢爛な宮殿や楼閣もどうでも良くなる。今の私は侘しい住まいの一間きりの家に愛着を感じている。たまたま都へ出向いて、乞食（食べ物を乞う）になると恥ずかしいと思うが、帰ってここに居る時は、都会の俗塵にまみれる人たちを哀れだと思ふ。もしも私の言うことを疑うならば、魚や鳥の有様を見るといい。魚は水に飽かない。魚でなければその心を知ることはできない。鳥は林を思い、鳥でなければその心はわからない。閑居生活の楽しさも同じだ。体験しない人にどうして私の心がわかるものか。

5 あとがき～月影かたぶきて余算山の端に近し

さて、私の人生の月は傾き、寿命の残りも山の稜線に近いところまで来ている。すぐにも三途の闇に向かおうとする時に、どうしてあれこれの不平を抱えようとするのか。仏さまの教えの骨子は、何につけても執着するなということ。だから今こうして草庵に愛着を持ち静かな生活にこだわるのも、成仏の妨げになるかもしれない。無駄な娯楽の話で時間を費やすことがいかにもつたいないことだろうか。

静かな早朝、こんなことを思い続けて、私は自分に問いかける。――世を捨て、山林へ引きこもったのは、心静かに仏道を修めるためであったはず。それなのにおまえは、姿こそ坊さんに似ているが、心は汚れに染まっている。栖は浄名居士の真似が出来ているようだが、その行いは周利槃特（釈迦の弟子で、最も愚かだった人）の行いにも及ばない。それは前世が貧しく賤しかったことの報いか、それとも心の迷妄のせいかな。その時、私は全く答えられなかった。ただ口で「不請阿弥陀仏」と三遍くりかえして終わった。

建暦二年（1212年）三月末日、

坊主蓮胤、外山の庵にてこれを記す。

「山かげは入る山の端もつらかりきたえぬ光をみるよしもなが」

(山かげは傾いた月の光を隠すので恨めしく思わせる。いつまでも光を見つづける方法は無いものか)